永続的教育革命斗争として教恥斗争を克ち取れ！

(一) 全共斗M総括

(イ) 全共斗Mの客観的必然性……ブルジョワ科学の学という存在様式の限界

プロレタリアートの労働の社会的生産力の発展に対応して資本は物的生産手段を拡充せねばならない。しかしその中で剰余価値の量の低下によって資本は過剰資本化する。社会的総合力として建設する力量を失い社会を破壊するものとしてしか資本は機能を果せない。機械的大工場制は、労働の社会的生産力の不断の増大を強制するが、最大の生産力としての労働力を、機械の付属物、純粋に物的な労働力たらしめることによって、労働の社会的生産力から、その主体的活動を全て排除する。しかし資本主義の枠内において資本はプロレタリアートの主体的活動(精神労働、理性)や生きがいをも組織せねばならない程、資本主義固有の原則の解体が進行している。

ブルジョワ学問の本性……対象の矛盾展開に自らは入り込まずに一面的にしか関係しえない理性の自然発性を本性とする。主体の一面的能力の外化＝構想力としてしかない。

(ロ) 主体的M展開 〈全体的斗争⇒いかに生き＝いかに生活し＝いかに革命するのか。〉

斗争内容と斗争形態の一致。一つの範チュウに属する斗争で[illegible]、範チュウを乗り越えて不断に形態を変え、さまざまな種類の斗争を自分の形態変化として内包するもの、すなわち、自分の内部に不断の運動を含み、そしてそれを統一する全体的斗争であった。

自己否定……絶対的に自己でしかない自己と社会的関係の総和の中の自己との矛盾展開、生きることの革命を無限の他者に働きかける中で実現する。

統一斗争……未分化的全体斗を未分化のままに放置し単なる外的斗争、1つの目標におし込める。動かざる個別組織の統一によって組織的理性の形成、多様な大衆の立ち上がりの中で組織を生かすのでなしに主体の一面的外化〈やるのかやらないのか〉として死んだ抽象が斗争をせまいワクに押し込めた。戦略的斗争の形成でなしに政治理論が戦略だと思われた。

(ハ) 反大学地区運動へ

[illegible]斗争のアジアという客観を方向性とし、三里塚斗争の全体性を全共斗Mの質的展開の豊富化として[illegible]で運動展開。

地区組織……場所と時間の規定性の解放。帝大解体学内運動(教育革命を軸とする所の学生によって担われる。)と帝大解体学外Mの総合統一を押し進める。戦士の結合をプロレタリア政治生活の組織を通じた関係の革命とおく。

(二) 教恥斗争

(イ) 教育研究会の問題……「サークル解体論」「反帝教育論」と実践に関する問題

全体的実践と教育実践の分離としてある所の公教育体系解体の確認を教研の実践の質を問う。会議と関係を問う中で主体の全体的実践の中の教育関係と押える中で、自明化され制度化される中で主体の内的矛盾の展開をはばむせまいサークル行動様式を打ち破る。教育問題を契機とする主体的条件の問題は[illegible]され、教育に対する固執性は帝大解体学内Mの軸を永続的教育革命斗争としなければならないとする所のものとなった。

サークル……授業の補完物としての自分の根拠と斗わないならば、時間と場所に規定された御都合主義的利用なれあい関係としてしかサークルそのものとしか形成しない。[illegible]として[illegible]に[illegible]張り出[illegible]主観的な[illegible][illegible]のだという[illegible]デモったさと[illegible]

(ロ) 教恥斗争経過報告

10、4……教恥斗争をやることを確認、方法は確認できず。

10、5……教育原理介入。教研、文ゼミ、入管の連系プレー。戦略を教恥方程をとっている学友が受動的なシステム化された自分を批判して立ちあがり、どのように生きるのか、他者に関わるのかを追求するように(ある)その中で教育革命を進行させる。[illegible]指ドと被指ドの分化。教える[illegible]の相互転換をはかる。幸福なる観念論者ドンキホーテ三木をぐうの根も出ない程にして彼の権威、権力を全てうばい、彼はどういう存在なのかを明らかにして学友相互の討論を形成するような形で学友に対応した。三木も含めて全員が(1)公教育を受けてきた総括(2)三木の授業における総括、(3)からの討論総括をレポートとして提出しかたにはそれで全体討論を行うことを確認した。

10、12……三木は我々に休講理由を一切明らかにしないで休講を告示した。100名でもって自主討論貫徹。三木を追求することを確認。

10.10：御茶の水において教研の一学友が三木と会う。今後の講試について詰問。水曜日（文学部以外の学部）の講試は行い、火曜日は菅原講師と交替し、19日（火曜日）には菅原講師と二人で出る（但し「奇病」が発生しなければ）ことを確認。
19：菅原のみ出席。三木は病気で火・水とも休講するとのこと，
討論は、菅原がヘゲをとり、こちらがそれに対応する形で、学友諸君と分りした（された）。
菅原との確約書。与度（26日）の討論に出席すること。
21：菅原が教研部員に伝言。三木は2～3週間休訂したのち、授業をうけもつ。三木はこの間のことに関して教取の学友に対して個別に通知するとのこと。
26：教取有志にて教取連絡会議を結成！
三木・菅原とも欠席。50名程で討論会。
27：三木からの手紙。自分の病気の説明以外に何らこれまでの我々の提起については答えナシ。三木と菅原の交替劇については不明瞭。個別に出席票と住所を書いたはがきの郵送を要請。
29：立て看表示。三木の授業放棄・逃亡を糾断。
30：教取連絡会議。三木との面交を確認。

（ハ）永続的教育革命斗争としての教取斗争

1)永続性を保障するもの
教育における問題を政府要取によって解決できる問題としてとらえず、他者にどのように教えるものとして立つのか＝どのように学びのか、どのように生き、生活していくのかとして問題をたて、教育関係の革命としてとらえること。

2)教育革命の展開（学生という存在矛盾の展開）
全共斗Mの質を全面的に受けつぎ、プルジョア的学問存在様式批判、教師批判、学生の日常生活全体の批判的認識の組織を通しての運動の持続。教室解体、クラス解体運動の徹底化。精神労働と肉体労働の結合。教える－教わるの分業を排した学生相互の関係形成の中で、うばわれた私的意識の解体を通じて認識能力、判断能力を奪還する。全体的実践と教育実践との分りに反対し、全体的実践の中に教育実践を求める。

（ニ）運動の現在と今後

(A) 教育研究会－教取連絡会議－教取授業粉砕運動の三者の中で、主体的矛盾の展開を形成する（他者と主体相互の働きかけ）運動の設定の中で教育革命を進行させ、各々の機能を分化、糾合、統一していく中で大学間の学内運動を形成し、学外運動と結合する質を形成する。

(B) 敵の攻撃（分断と恫喝）の粉砕のために。（授業の長期的休訂、授業の一方的押しつけ）
教取連絡会議の強固なる運動形成。
教連会としての運動
- 三里塚農民学校、夜間中学、入管との実践的関わりの形成
- 連絡会議の位置を教育革命の更なる進行によって、学び＝教える、批判＝自己批判の行いうる基礎関係を形成し、発展させる。
- 大家目次

教取課程履習の学友に対する働きかけ
- 授業粉砕（教取原理以外も）
- 立て看、ビラ、青空討論等
- 大家目次